

「暑さ寒さも彼岸まで」はどこへやら。「彼岸」が待ち遠しい稲刈月です。
現在会員登録数 4,318 人さま。次号は 10 月 22 日発行の予定です／

＋-----◇◆◇ 目次 ◇◆◇ -----＋

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

《5》宮川健郎 私の出会った児童文学者たち

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

＋-----＋

■-----■

【1】お知らせ

■-----■

●「第41回 日産 童話と絵本のグランプリ」作品募集

アマチュア作家対象の創作童話と絵本のコンテスト。子どもを対象とした未発表の創作童話、創作絵本を募集します。締め切りは10月31日（木）です。詳細は↓↓

http://www.iiclo.or.jp/07_com-con/02_nissan/index.html#41boshu

●「大阪国際児童文学振興財団 研究紀要」第38号の原稿募集

応募締切：10月31日（木）

※詳細は → http://www.iiclo.or.jp/06_res-pub/04_journal/boshu.html

● «ご寄付をお願いします» 当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。

※詳細は → http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html

※Syncable（シンカブル）＝継続寄付（毎年／毎月）、単発寄付が選べます。
→ <https://syncable.biz/associate/19800701>

● YouTube版「本の海大冒険」 <https://www.youtube.com/@iicloll196>

※公開内容一覧は → http://www.iiclo.or.jp/ml_youtube/index.html

● Instagram https://www.instagram.com/iiclo_official/ 随時更新

● X（旧Twitter）https://twitter.com/IICLO_News 毎日更新

■-----■

【2】コラム

■-----■

《1》この本読んだ？ Yasuko's & Takeo's Talk

『ヤングタイマーズのお悩み相談室』 石川宏千花/作 飯田研人/装画・挿絵 くもん出版 2024年7月 対象年齢：中学生以上

* 今回のゲストは当財団理事長の宮川健郎さん（T）です。

あらすじ：皆吉黛生（みなよし たいせい）という38歳の俳優と、29歳のミュージシャン・八十色類（やそいろ るい）のラジオ番組『放課後の放課後』が舞台になった作品。その番組のなかに中学生から悩みを募集して二人がそれについて語り合う『ヤングタイマーズのお悩み相談室』というコーナーがあり、中学1年生から3年生までの6人の男女が、悩みがない、友だちがうらやましい、友だちとぎくしゃくしてしまった、サイコパスな自分じゃなくなりたい、凡人なのが辛い、世の中の人たちに腹が立つという悩みが相談される。パーソナリティは、1980年代後半から2000年代前半ぐらいに生産された車（＝ヤングタイマー）が好きという点で共通している。

T：耳で聞く「ラジオ」が仕掛けになっているユニークな作品が出版されました。

Y：ガソリン車が好きで、ちょっとマニアックで、独身の男性二人がパーソナリティです。一人は、個性的な俳優で、もう一人は、ミュージシャン。つまり、いわゆる学者やカウンセラーではなく、ちょっと世の中のアウトサイダー的な位置にいる人たちです。

T：その二人が、中学生の「お悩み相談室」コーナーを担当します。

登場するのは6人の中学生で、「かさぶた」「贅沢保湿」「あなたの嘘」など、ユニークなラジオネームで悩みを相談します。その中で軸となるのが、冒頭の「かさぶた」こと「しなかん」と、結末の「ぬりかべ」こと「ルウ」です。二人は同じクラスで、しなかんは、ルウが入ることを決めたボランティア部に所属しています。ボランティア部では、放課後のゴミ拾いのほか、地球環境にかかわる会議などを開催しています。

Y：しなかんがラジオを聞き始めたのは、皆吉黛生のファンだからで、悩みは、なにも悩みがないこと。最初から深刻でないところが笑えます。

とはいえ、そこからは、友だちや家族や恋愛の悩みなど、思春期ど真ん中の悩みが語られていきます。相談者たちが悩みを言葉にし、パーソナリティたちのユーモラスであたたかい語りを聞くことで自分自身を客観的に見つめられるようになる過程が描かれます。

T：相談にのる二人が、相談内容の短い言葉から想像して、相談者の本音を掘り出すところがうまい！

Y：それも自分たちの中高校生のころや今のネガティブな感情や失敗談をさらけ出すことで、相談者たちが心配していることを受け止める点がいいですよね。決めつけるんじゃなくって、相談者が言いたいことはこれかなと多様な可能性を示すという態度に共感しました。

T：「どんなに小さく思える悩みでも、本人にとってはあした生きるかどうかを決めるくらいもの。」というのもいいですね。

Y：そして、間でかける音楽がユニーク。1970年代のロックやポップスで若い世代にポップな文化を手渡しているなあと感じました。

T：個人的な悩みのあと、最後は、ぬりかべさんの、環境問題に向き合わない世の中の大人たちに対する不信と怒りです。社会へつながって終わることで、作品が広がりました。

オムニバスになっているから、「朝読」でも読めるな。思わず生徒が夢中になって読み続け、先生に取り上げられて、先生が読んでみて夢中になる。そんなことが起こりそうな作品だなと思いました。

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

第109回「いちょうの実」

旅立ちに見え隠れする時代の影

あるすみきった明け方、母である〈いちょうの木〉から生まれた〈千人の黄金色の子供〉(いちょうの実)たちは、みんなドキッとして目を覚まします。今日は、旅立ちの日でした。母は悲しみのあまり、〈扇形の黄金の髪の毛を昨日までにみんな落して〉しまったのです。

「僕なんか落ちる途中で眼がまわらないだろうか。」

「ね、あたしどんな所へ行くのかしら。」

「あたしどんなめにあってもいいからお母さんの所に居たいわ。」

「そら、もう明るくなったぞ。嬉しいなあ。僕はきっと黄金色のお星さまになるんだよ。」

「わたし困ってしまうわ、おっかさんに貰った新しい外套が見えないんですもの。」

「わたしのを時々貸してあげるわ。凍えたら一緒に死にましようよ。」

東の空が白く燃え、子の思いがさまざまに語られるなか、母なるいちょうの木は〈まるで死んだようになって〉立ちすくみます。そのとき、〈光の束が黄金の矢のように〉飛んできて、〈北から氷のように冷たい透きとおった風〉がふいたとき、子どもたちは一斉に枝から飛び下ります。〈さよなら、おっかさん。〉〈さよなら、おっかさん。〉母と子の別れに対し、お日様は〈あらんかぎりのかがやき〉を投げかけます。

毎年繰り返されるイニシエーションとしての旅立ち（巣立ち）と別離。「いちょうの木」に材を得た〈子どもたちの自立と母親の子別れの主題を黄金色の風景として見事に描いた一篇〉(宮川健郎「いてふの実」2003年)と言えます。

独り立ちへの祝祭的なまなざしが見られる反面、たびたび〈死〉が描かれていることも見逃せません。厳しい自然のなかで、生を全うすることは容易いことではなく、それはこの時代を生きた子どもにも通底することだからでしょうか。パン（食）、外套や靴（衣類）、薄荷水（薬）など、いずれも生き抜くために必要なアイテムがさりげなく挿入されています。

作品が書かれたのは大正10年（推定）。賢治の作品にも影を落とすシベリア出兵の時期でもありました。同年12月、盛岡からも一箇中隊（花巻で演習実施）が派兵されたそうです。作品は、大自然の営みを「子の巣立ち、親の子離れ」に重ね合わせた珠玉の一篇でありつつ、他方で死の影、城や領土（国を分ける）、外套や靴といった近代的な装備に、時代との重なりも思わず連想してしまいます。（ペ吉）

（本文の引用は、新潮文庫版『ポラーノの広場』によりました。）

《3》子どもの本の珠玉のことば 63

その大きな鳥のすみたいのが、ふたつできると、大きい子は下におり、かわ

りに三年生ぐらいの子がふたり、そのすの上にあがりました。あきらとかずおでした。

そして、ふたりはさけびました。

「おじさんたち、工事をやめてくださあい。市長さんにあうまで、ぼくたちは木からおりませえん。」

木の下の子どもたちも、いっせいにさけびました。

「工事をやめてくださあい。市長さんと話したあい。」

あきらののぼっている木からは、おなじことばを書いた、長い紙がたれさがりました。

(『モグラ原っぱのなかまたち』 古田足日/作 田畑精一/絵 あかね書房 1968年12月 p.151)

神奈川近代文学館で企画展「没後10年 古田足日のぼうけん」が開催されています(9月29日(日)まで)。企画展に行く前に懐かしくなって、子どものときに出会ったこの作品を読み直しました。

小学2年生から3年生になる間のあきら、なおゆき、かずお、ひろ子の4人の子どもと、受け持ちの石川洋子先生を中心に、学校生活と学校外での生活が描かれています。4人は、見つけた原っぱを「モグラ原っぱ」と名付けて遊びますが、ある日、あきらがモグラ原っぱにやってくると、ダンプカーが工事をしており、市営住宅が作られることがわかります。4人は市役所へ行って市長さんに会おうとしますが追い返されてしまいます。そこで、引用の場面になります。

グレタ・トゥーンベリが注目されるようになってから、最近の子どもの本には、社会に対して発言したり、運動したりする子どもが描かれることが増えてきましたが、『モグラ原っぱのなかまたち』には、理不尽な大人たちに対して抵抗する子どもたちが既に描かれています。

男女の描かれ方など、今の社会では、「古い」と思われる部分もありますが、この作品を読むといつの時代も子どもは大人の横暴さに怒っていたんだなと思わせられます。私が出会ったのは小学3年生ぐらいに同い年の読書好きのいとこの家でした。あきらたち子どもたちの行動力にすごいなと思い、原っぱって子どもにとって大切な遊び場なんだなと思ったことを記憶しています。(Y)

《4》 行って来ました！

西宮市大谷記念美術館で10月14日まで開催されている「2024 イタリア・ボローニャ国際絵本原画展」に行ってきました。この展覧会は、毎年行われる子どもの本専門の国際見本市「ボローニャ・チルドレンズ・ブックフェア」(絵本原画コンクール)に入選した作品の原画展です。今回は、日本人4人を含む32カ国78人の入選作5点ずつに加えて、特別展示として、35歳以下の入選者の中から選ばれるボローニャSM出版賞を受賞したアンドレア・アンティノーリの作品と、出版された絵本を対象にしたボローニャ・ラガッツイ賞 特別部門「海」で受賞した下田昌克『死んだかいぞく』の原画が展示されていました。

図録にある「2024 イタリア・ボローニャ国際絵本原画展審査レポート」にもあるように、「ボローニャ展の魅力は、何よりもその作品に見る国際性や文化

的な多様性」であり、技法に関しても「ペインティング、ドローイング、コラージュ、銅版画、リトグラフ、そしてデジタルメディアなど、多種多様な制作方法とさまざまなスタイル」が見られました。

特に印象に残った作品に、キム・ソンジン（韓国）の「こころはどこに」がありました。これは、子どもがおじいちゃんに心がどこにあるのか聞いて鍵をもらっている絵（「おじいちゃんはこころも開けられるの？」）と、子どもが市場に来ている絵（「おばあちゃん、こころも買えるの？」）の絵などが展示されており、鍵を売るお店や市場の細かい情景が人の暮らしと心の中のかかわりを巧みに描いているように感じました。

また、フェレシュテ・ナジャフィ（イラン）の「ゾウの記憶」は、認知症のおばあさんがゾウであったことを思い出し、ゾウに変身するという絵で、黄色いゾウの絵からおばあさんの不安や混乱や孤独が感じられました。フェルナンド・ペレス＝エルナンド（スペイン）の「喜んでお仕えます」は、犬が飼い主であるガイコツの行方不明の骨を見つけ、そのあと、犬はガイコツにひもでつながれてうれしそうに散歩に出かけます。ガイコツと犬の様子がユーモラスで豊かな物語を想像させました。

土曜日の朝 10 時に入館しましたが、家族づれをはじめ、多くの方が来館されていて人気の高さを実感しました。毎年恒例の「ポローニャ絵本原画展」に今年も行くことができ、世界の絵本文化に浸る喜びを感じることができました。（K）

西宮市大谷記念美術館 <http://otanimuseum.jp/>

《5》 宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第14回

第4章 宮川ひろ
その3 『「へてか へねかめ」おふろでね』（後半）

これまでの三つの章では、坪田譲治先生、前川康男先生、今西祐行先生、あまんきみこさんのことを書きました。この先生がたと母宮川ひろのかかわりを軸に書きましたから、もう、すでに、母のデビュー作『るすばん先生』（ポプラ社 1969 年）のころまでを述べています。

第4章では、宮川ひろ（1923～2018 年）のデビュー以降のさまざまを作品に即して振り返ります。母もまた、私の出会った児童文学者にほかなりませんでした。

この連載では、「思い出話」を語るだけではなく、私の出会った児童文学作家や評論家の仕事に対する考察や、さらには、そこから、現代児童文学史のとらえ直しも試みます。ご愛読ください。

今回で、第4章「宮川ひろ」はおわります。来月は休載させていただき、2024 年 11 月配信の第 171 号からは第5章「古田足日先生」です。

<本編はこちらから>

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/watashinodeatta.html

■ ----- ■
【3】全国のイベント紹介
■ ----- ■

● 特別展「エドワード・ゴッリーを巡る旅」

会場：奈良県立美術館

会期：開催中～11月10日（日） 休館日あり 観覧料：有料

主催：奈良県立美術館

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

■ ----- ■
【4】プレゼント
■ ----- ■

今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『ヤングタイマーズのお悩み相談室』をプレゼントします。ご希望の方は、プレゼント応募フォームから、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ (5)このメルマガのご感想をお書きのうえ 応募ください。

応募フォーム⇒ <https://forms.gle/1GzdaWoDzE4pc7ku8>

締切は10月10日（木）、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |

— | — | — | — | — | — | — | — | — | — |

先日、よく行く温泉施設の露天風呂で、「名月や・・・」と頭に浮かべつつ、まん丸お月さんを愛でていましたが、あとのことばが出てきません。「ああ名月や 名月や」と続けると、あの有名な松尾芭蕉の句らしいと聞き、思わず「なるほど」。ところがよくよく調べてみると作者不詳とのことで、ちょっとびっくりしました。(TA)

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/index.html

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>

〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北1-2-1 大阪府立中央図書館内

TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp

